様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 23 年　6 月 15 日現在

機関番号：32702
研究種目：基盤研究（C）
研究期間： 2008～2010
課題番号：20520530
研究課題名（和文）　非専攻課程のための新しいロシア語習得基準とその教育内容に関する総合的研究
研究課題名（英文）　A Study about a Standard for Non-Major Russian Language Education in Japanese Universities and its Contents
研究代表者
堤　正典（TSUTSUMI MASANORI）
神奈川大学・外国語学部・教授
研究者番号：80281450

研究成果の概要（和文）：近年のロシアの発展により、日本とロシアの交流の場は広がり、日本においてロシア語人材の輩出の必要性はさらに高まっている。日本での英語以外の外国語教育の大きな部分は大学教育が担っており、大学における専門教育のみならず、非専攻課程としてのロシア語教育の重要性もますます高くなっている。そこで、非専攻ロシア語教育のための習得基準の研究を行い、また、ロシア語語彙の習得のための新しい教材を開発した。

研究成果の概要（英文）：As the relationship between Japan and Russia has become more important, this situation creates more need for people who knows the Russian language and more importance of a non-major Russian education in Japanese universities. Thus, we made a study on a new standard for non-major education and provided an example based on CEFR (preA1 or A0). We also developed a new system of Russian vocabulary learning for non-majoring students.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2009 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総　計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学・外国語教育
キーワード：教授法、カリキュラム論、ロシア語教育、習得基準、CEFR

１．研究開始当初の背景

(1)「ロシア語をとりまく状況の変化」

20 年前のロシアにおける体制転換により、政治的な側面だけではなく、経済的側面や文化的側面においても、大きな変化があった。

現在のロシアは、様々な分野において、様々な人々による交流が可能な国となっている。ソビエト時代とは異なり、21 世紀の現在では、ロシアとの交流において欠かせないロシア語は、特定の専門家だけが用いる言語ではなくなった。

ところで、日本においては、英語以外の外国語教育の大きな部分を大学教育が担っているが、ロシア語教育は、日本の大学において、専門教育としてのみならず、いわゆる「第二外国語」等として非専攻課程教育としても長年行われてきた。

現在は、ロシア語の専攻課程で学んだような専門家だけがロシア語を使ってロシアと交流をする時代が終わり、非専攻課程教育によりロシア語を学んだ人材がロシアとの交流のより重要な部分を担う可能性がある時

代となっている。
(2)「教育現場の変化　―セメスター制の導入、不均質な学生」
　上で述べたように大学における非専攻課程としてのロシア語教育の重要性が高まりつつあるが、教育現場としての日本の大学も変化の中にある。「学年」あるいは「通年」というような１年をひとつの学修期間とすることから、「セメスター」や「半期」と呼ばれるような、より短い学修期間をひとつのユニットとするようになってきている。単位認定が半期で行われることが通常となっているのである。通年ではなく、半期において、学習目標を立て、その達成度を明確にはかれるようにしなければならない。
　また、大学の非専攻課程教育は、学部学科横断的な共通科目として実施されることも多く、学生の学修動機や能力は一様でないことも多い。このことは、専攻課程とは決定的に異なる。いずれかの専攻課程を選択することが大学への入学意図そのものである。また、何らかの選抜を経ているため、専門教育に必要な能力は比較的一定である。それに対し、非専攻課程教育として何を選ぶかについての動機やそれを学習する能力は非常に多様である。
　このような学生に対して、個々の学習達成度を示したり、各自の学習のガイドラインを明確にしたりする必要がある。上では、半期ごとに学習成果がはかれるようにするべきだと書いたが、より理想的には、半期ごとではなく、もっと短いスパンで学修成果が実感できるような目標設定が必要である。
(3)「習得基準への関心の高まり　―ヨーロッパ言語共通参照枠（CEFR）等」
　外国語教育においての学習達成度や学修ガイドライン、すなわち「習得基準」は今日大いに注目されている。いくつかの習得基準のうち、日本やその他の地域で広く話題となっているのは、欧州評議会による「ヨーロッパ言語共通参照枠」（CEFR）である。ロシアも欧州評議会のメンバーであることから、ロシアにおける外国人向けロシア語教育は、「ヨーロッパ言語共通参照枠」に準拠している。しかし、日本のロシア語教育においては、広く知られているとはまだまだ言えないであろう。
　我々は「ヨーロッパ言語共通参照枠」を、大学における非専攻課程ロシア語教育の習得基準を策定する際に、検討すべき対象として大いに注目している。

２．研究の目的
(1)「日本の非専攻課程教育を念頭においた既存の習得基準の再検討」
　長年行われてきた日本の大学での非専攻課程ロシア語教育においても、教科書は、通常、最初のページから順に進めて行くことを想定していた。非明示的ではあっても「習得基準」が示されており、それがなかったわけではない。変化が激しい今日のロシアであるから、既存のものがロシア語を学ぶのにふさわしいかどうかは慎重でなければならないだろう。現在に適合する「新しい習得基準」を策定するためには、そのような「既存の習得基準」を検討しておく必要がある。
(2)「非専攻課程ロシア語習得基準の策定に向けての検討」
　既存の習得基準を含む、内外のロシア語教育の状況等をふまえ、新しい非専攻課程ロシア語教育のための習得基準の策定を目指して検討を進めた。それは、ロシアの変化や、日本の大学教育の変化に対応したものでなかればならない。
(3)「非専攻課程ロシア語教育習得基準の内容の検討」
　「新しい習得基準」を検討するだけでなく、それに基づいた教育内容を検討しなければ、習得基準は机上の空論に終わってしまう。実際の教育現場に用いられてこそ、習得基準の存在意義がある。この教育内容も、現在のロシア、現在の日本の大学教育にふさわしいものでなければならない。

３．研究の方法
(1)「既存の教材分析および文献調査・実地調査に基づくロシア語習得基準の比較検討」
　既存の教材が暗に定めていた学習順序というような「非明示的な」習得基準も含めて、これまでの習得基準を再確認した。
　また、文献調査や、可能であれば実際に教育機関を訪問して、国内外でのロシア語教育における習得基準の状況を調査した。
(2)「教育現場に即した習得基準の策定に向けての検討」
　日本の大学における非専攻課程ロシア語教育と言っても、大学設置基準の大綱化以来、そのあり方は様々である（カリキュラム、クラスサイズ、使用可能な機材、等々）。そこで、まずは我々が勤務する神奈川大学のそれにおいて活用しうる習得基準の策定を目指して検討を行った。
　なお、新しい習得基準を検討するにあたって、以下の項目に分けて、それらについてのミニマム・エッセンシャルの検討を行った。
　① 表現
　② 文法
　③ 語彙
　④ レアリア（言語使用に必要な現実や背景に関する知識）
(3)「習得基準に基づいた教育内容の策定に向けての検討」
　ロシア語教育においての習得基準やミニマム・エッセンシャルを検討したわけだが、

それらを実際の教育内容に盛り込むべく検討を行った。これは、まず我々が教育活動を行っている神奈川大学に適用するものとしたわけだが、もちろん、他大学におけるロシア語教育でも用いることが可能になることを十分に念頭においた。

(4)「実地での検証と改良」

習得基準と教育内容は、常に教育現場で検証を行い、出来うる限りの改良を重ねていった。

４．研究成果

(1)「既存の教材分析」

現在、神奈川大学の非専攻課程ロシア語教育で用いている５種類の教材について、それぞれの内容をヨーロッパ言語共通参照枠に照らし合わせるなどして分析を行った。

(2)「習得基準：ヨーロッパ言語共通参照枠（CEFR）A0 レベルの提示」

ヨーロッパ言語共通参照枠は最初歩のレベルは A1 とされ、順に A2、B1、B2、・・・と上がっていく。しかし、日本の大学の非専攻課程においては、A1 レベルより下のレベル（pre A1 あるいは A0）を付け加える必要があると考えた。なぜなら、A1 を最初の目標とすると、まったくの初学者を対象とした授業が週２回おかれている神奈川大学においても、それは１年あるいはそれ以上の期間を見越した目標となってしまい、半期で単位を認定するセメスター性においては不適当であるし、さらに言うと、実際にはもっと短い期間でステップアップが実感できるような目標設定が必要である。

これらのことをふまえて、「A0 レベル」について検討を重ねた。

(3)「教育内容（教材）の開発」

非専攻課程ロシア語教育における新しい習得基準に準拠する教育内容（教材）について、検討を重ねてきた。表現、語彙、文法、レアリアの必要最低限の項目を効果的に学習できるように配置することが必要である。

既存の教材を改良し、実際の教育の場でも検証を進めた。

特に語彙に関しては、具体的な学習システム「単語プラウザー」を開発した。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

① 小林潔　「最近のロシア語教育研究の動き―日本ロシア語教育研究会の２つの会合―」　『複眼』（神奈川大学外国語科目教育協議会）第 19 号（2011 年２月）：3-4 頁。査読無し

② 小林潔　「ベルリンにおけるロシア語教育の一端」　『ロシア語教育研究』（日本ロシア語教育研究会）創刊号（2010 年５月）：65-72 頁。査読有り

③ 小林潔　翻訳　ベルトルト・ブラント「ロシア語を異言語として教授すること―ロシア語教育概観―」　『ロシア語研究《木二会》年報』第 22 号（2010 年３月）：53-79 頁。査読有り

④ 堤正典　「図書紹介　ロシア語教育研究会編著『授業づくりハンドブック　ロシア語』」　『ユーラシア研究』（ユーラシア研究所）第 40 号（2009 年５月）：72 頁。査読有り

〔学会発表〕（計８件）

① 堤正典（代表）・小林潔 ”Преподавание русского языка как непрофилирующего предмета в Японии [Prepodavanie russkogo jazyka kak neprofili-rujushchego predmeta v Japonii]”（露語）　第 12 回国際ロシア語ロシア文学教師連盟 [МАПРЯЛ:Международная ассоциация преподавателей русского языка и литературы]大会、2011 年５月 13 日、上海：上海外国語大学。

② 堤正典（代表）・小林潔　「非専攻課程ロシア語教育を考える―習得基準・言語政策・IT―」　日本ロシア文学会 60 周年記念大会（第 60 回全国大会）、2010 年 11 月６日、熊本学園大学。

③ 小林潔（代表）・堤正典　「ロシア語教材を見直す―非専攻課程習得基準の策定を念頭に―」　ロシア・東欧学会／JSSEES2010 年合同研究大会、2010 年 10 月 24 日、天理大学。

④ 堤正典　「ロシア語におけるモダリティとアスペクト―日露対照研究とロシア語教育の観点から―」　神奈川大学共同研究奨励助成プロジェクト「統語論的アプローチと語用論的アプローチによるモダリティの対照研究」モダリティ・プロジェクトワークショップ 2010―モダリティ研究と言語教育―」、2010 年７月 24 日、於神奈川大学。

⑤ 小林潔（代表）・尾子洋一郎・堤正典　ポスターセッション「ロシア語初学者用語彙データベースの制作と運用」　日本ロシア文学会全国大会第 59 回定例総会・研究発表会、2009 年 10 月 24, 25 日、筑波大学。

⑥ 堤正典(代表)・小林潔・尾子洋一郎 「ロシア語教育における基本語彙データベースの活用とその効果について」 社団法人私立大学情報教育協会平成 21 年度教育改革ＩＴ戦略大会、2009 年 9 月 3 日、私学会館。

⑦ 堤正典 「非専攻課程のためのロシア語習得基準の策定によせて」 木二会例会、2009 年 8 月 29 日、東京外国語大学。

⑧ 堤正典 「台湾におけるロシア語教育視察報告」 神奈川大学ユーラシア研究センター設立記念ワークショップ、2009 年 6 月 5 日、神奈川大学。

〔図書〕(計 4 件)

① 堤正典・小林潔[Цуцуми Масанори, Кобаяси Киёси] “Преподавание русского языка как непрофилирующего предмета в Японии″[Prepodavanie russkogo jazyka kak neprofilirujushchego predmeta v Japonii]″ Вербицкая Л.А., 劉利民、Юрков E.E.編『時間与空間中俄語和俄羅斯文学』第 3 巻、上海：上海外語教育出版社 (2011 年 4 月、全 749 頁)：521－524 頁。〔書名は簡体字表記〕、(露語) 査読無し

② 堤正典・小林潔編 『ロシア語学と言語教育III』 神奈川大学ユーラシア研究センター、2011 年 3 月：全 124 頁。
掲載論文：
堤正典 「非専攻課程ロシア語教育と習得基準をめぐって」(5-9 頁)
小林潔 「ロシア語教材を見直す―非専攻課程習得基準の策定を念頭に―」(11-34 頁)
尾子洋一郎 「ロシア語教育における基本語彙データベースの制作について」(35-45 頁)
塚本善也 「台湾の大学機関におけるロシア語教育の概況」(73-78 頁)
小林潔 「ロシア語母語話者のある教育観協働をいかにすすめるか―トゥルヒーン論文に寄せて―」) (81-86 頁)
トゥルヒーン・ミハイル “К отыту преподавания русского языка в Японии: проблемы и перспективы обучения〔日本に於けるロシア語教育の一つの試み-問題と展望-〕“(露語、87-96 頁)
以上、査読有り

③ 堤正典 「ロシア語におけるモダリティとアスペクト―日露対照研究とロシア語教育の観点から―」 『発話と文のモダリティ―対照研究の視点から』(武内道子・佐藤裕美編、ひつじ書房、2011 年 3 月)：225-232 頁。査読有り

④ 小林潔 [KOBAYASHI Kiyoshi] „Sekiguchi- Grammatik und die didaktische Grammatik des Russischen in Japan“. In: Kennosuke Ezawa / Kiyoaki Sato / Harald Weydt (Hrsg.) „Sekiguchi-Grammatik und die Linguistik von heute“. Tübingen: Stauffenburg Verlag, 2009. Nov. SS. 119-124. (独語) 査読有り

〔その他〕
ホームページ等
① 科学研究費補助金データベース
http://kaken.nii.ac.jp/ja/p/20520530

② 私立大学情報教育協会平成 21 年度教育改革IT戦略大会、堤正典 (代表)・小林潔・尾子洋一郎「ロシア語教育における基本語彙データベースの活用とその効果について」
http://www.juce.jp/archives/taikai_2009/d-10.pdf

６．研究組織
(1)研究代表者
堤 正典 (TSUTSUMI MASANORI)
神奈川大学・外国語学部・教授
研究者番号：80281450

(2)研究分担者
小林 潔(KOBAYASHI KIYOSHI)
神奈川大学・外国語学部・准教授
研究者番号：20350374

(3)研究協力者
塚本 善也(TSUKAMOTO ZENYA)
台湾台北市 中國文化大學日本語文學系・助理教授
尾子 洋一郎 (OGO YOICHIRO)
神奈川大学・外国語学部・非常勤講師
トゥルヒーン・ミハイル(TRUKHIN MIKHAIL)
神奈川大学・ユーラシア研究センター・客員研究員